ろう。

（1988年 ぬめひろし著 地名譚（はなし））

3.　みくらはな

新野直吉の著書、『改訂版秋田の歴史』に「文政7年西暦1824年、（管江真澄に）地誌作成再開の内命があったのは、文政3年に致仕し、三倉鼻の別荘茶室で由之（良寛和尚の弟、山本由之氏）とも会った岡見友康の真澄再評価が大きく影響し‥云々」という記載がある。このことからすでに江戸時代後期には三倉鼻に茶屋が建つようになっていたことが伺える。

（作　者）

4.　みくらはな

三倉鼻は、秋田・山本両郡境の筑紫岳に連なる盤（いわ）船長根の崎の先端が潟にのびているため、この名がある。　八郎潟の水面は現在より東側に寄っていたから、恐らく潟面に突き出していたものだろう。岩山であったため開削が激しく、湖岸道路を南北に切断していたから、真坂と山本郡の潟岸集落天瀬川（あませがわ）は山道で結ばねばならなかった。結局この二郡の連絡は、中世末までは五輪坂（ごりんざか）越え、江戸に入ってその西側のいわゆる羽州街道の開通、明治35年（1902）の現奥羽本線、及びそれより2年ばかり早い旧国道の開通、そして昭和30年代の潟岸をはしる国道7号線の開通、以上の順序になる。ところで羽州街道は、慶長年間に開削されたものであるが、山道である。旧街道跡は、旧国道に吸収されたまま奥羽本線の東側を平行して北上し、旧道が北西に向きをかえて奥羽本線をこえる所で分かれた。街道はそのまま奥羽線と平行したまま北上して三倉鼻公園に入った。明治14年（1881）に東北巡遊した明治天皇行在所跡が沿道に残っている。その後の街道は右折・左折をくり返し、筑紫岳と三倉鼻の間を縫うように北上して山本郡に入った。

「歴史の道調査報告Ⅳ　北部羽州街道」
秋田県教育委員会

5. みくらはな

南秋田郡、山本郡の郡境でもある急峻堅固な三倉鼻とは、今はない筑紫岳からつらなる八郎潟湖畔に突き出た盤船長根の岬であります。伝・荻津勝孝「秋田街道絵巻」にもその様子が描かれています。

その昔、山越えするにはあまりにも難所のため東側の山中を通ったといわれており、天正の頃、秋田実季が要路をして、人馬が通れるように切り開き、後に慶長9年（1604）徳川幕府の命により、国道として整備されました。更に明治33年（1900）奥羽本線開通工事によって峰続きは完全に遮断され、三倉鼻とよばれるようになりました。

藩政期は郡境であったので、秋田郡と山本郡から一人ずつの奉行が出張して通行人の監視にあたっていました。また三倉鼻の頂上は八郎潟を望む風光明媚の場所で、茶屋も一軒あって旅人には絶好の休息所となっていました。今も三倉鼻は、三倉鼻公園として春は桜の名所で近隣の人たちで賑わいをみせています。

東側は筑紫岳跡の石材採掘、西側は日本海、男鹿半島、大潟村を一望できる風光明媚な景勝地として、幸田露伴や菅江真澄や正岡子規など沢山の文化人が訪れています。またすぐ南側の南面岡（ひづらおか）公園は、明治天皇御巡幸の際の御野立所としても有名な場所で、そばには芭蕉の句碑、そして正面奥には「南面岡」命名の由来を記した南面岡碑銘があります。

三倉鼻の名称については、元禄15年（1702）の「三倉鼻名所記」に八郎太郎が湖を作る際に、土地の長者が追われてここに三つの倉を立てたが、時が移ってその倉が石の倉になってしまったとあります。

また菅江真澄の『かすむ月星』に「三鞍波南、山の高う峙へたるを、くにうどくらといふ。三のくらてふこととなん。はた、うまのしづくらにも似たれはいうとも」とあります。伝説に由来するか形態からみるか、諸説があります。

同じ『かすむ月星（図絵）』に「いただきに石の地蔵をすえて地蔵峠の名とも聞え」とあり、その地蔵は天瀬川の小玉家文書「救漁地蔵尊造立奉加